

展望論文

子育て支援をめぐる「支えあいの輪」の機能

子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ

高木 和子¹⁾

A note on the developmental function of interdependent participation in collaborative activities that support young mother's child care : towards the core concepts for our Child Project.

TAKAGI Kazuko

In purpose of making sense for the core concepts of our project, we search the words for explain the mechanism of adult development in the field of group activities. We found the several types of participation in groups for supporting young mothers and parent activities in day care centers. These types of participation are differed the level of interdependency in collaboration. So "interdependent participation" will be one of our core concepts that have some developmental function.

(1) Participants understand that they may depend on the others in case of they have some trouble. (2) Participants may acquire some skills of mutuality for collaborate to others. (3) Participants recognize themselves altering through collaboration, and the others too. Both may develop any time. (4) Participants may orient the experiences in collaborative activities on their life-course development. They aware their life collaborate with many others.

And these are discussed on Takagi's Model of life course development.

Key words : interdependent participation , collaboration , adult development

キーワード : 支えあう参加 (支えあいの輪) , 共同 , 大人の発達

はじめに

われわれのプロジェクト参加者が、子育て支援という場における大人の育ちをとらえていくときの了解事項として、発達の間を社会生活における学びの領域に広げて考えることと、「生涯発達」を一人一人を認め合い、仲間と共に生きることによる個性化の過程をとらえることがある(高木, 1995)。そしてその根幹にあるの

が、社会生活における学びは、参加者同士の相互作用によって成立するものであるという認識である。

社会生活における学びは、家族や仲間、職場や地域などにおける関係の中で多種多様に展開されている。子ども時代は社会の成員としての適応過程に重点が置かれるが、成人期の発達課題には、自分たちで社会を運営して行くことと、次世代を育成することが含まれてくる。前者の学びには「参加過程」が、後者の学びでは年少

1) 立命館大学文学部

者（子ども）との関わりからうまれる学びの内容が明らかにされねばならない。これまでの相互作用による学びの研究においては、世代の違いに近い概念として熟達者と初心者の参加が取り上げられてきているが、相互作用による熟達者側の変化についての言及は少ない。それはとりあげられている学びの視点が知識獲得に置かれることが多かったことによる。成人期の発達にとって重要となるものは何かを具体的な場を想定しながら、「大人の発達」を考えて行かなければならないのである。

本研究グループには、研究協力園である蜂ヶ岡保育園での保育者や保護者の「育ち」にをとらえるという具体的な場があった。その中では「保育園での行事に参加することによる親の育ち」や「参加を促している要因」なども検討された（高田，2004）。また、保育園での子どもの育ちを毎日支えている保育者自身の育ちが、共に働く仲間との共同によって支えられていることも、保育者同士の経験談をとおして明らかにされた。そして、この議論に参加した結果として、子育ては親だけでできるものではなく、子どもの育ちを見守る大人たちの「支えあいの輪」のなかでなされるものだという視点をもつことを提案している（高木，2002）。

ここでの作業をとおして、保育園という働く母親を支援して行くところでは、子どもを共に育てて行くという「共同の場」がどのようにしてつくられ、どのような参加のしかたがあり、どのような学びがなされて行くのかを考えさせられた。若い母親たちは、仕事と育児とを両立させていかなければならないという現実の中で、家族からの理解と支援を受けながら、保育園と共同して子育てをしている。彼らの多くは、乳幼児期という子どもの発達にとって大切な時間を「共に育てている」という実感をのもてる参加をすることで、自分たちも発達しているという実感をもっていた。

しかし、誰もが「親になることで自分が発達した」という実感が持てるわけではない。はじめて子どもをもった多くの人（母親）が、子どもを育てることに不安やストレスをかかえている。思うようにならない幼子を抱えて、一人で悪戦苦闘しているのである。そこには、「子どもを育てる責任」から、他者との協力を必要としていることに思いが至っていないことも多い。幼い子をかかえた親だけではなく、不登校などの問題をもつ子どもの親たちにも同じような悩みがあることも明らかになってきた。

一方では、親の側の大人としての生活が優先されて、親としての自覚がないようにさえ見える事例もある。社会における大人の生活の変化に目をむけずに「子どもを育てることが大人としての発達の契機になる」ということを単純に一般化することは難しいと実感してきた。

以上の経緯から、われわれの研究グループでは、子どもを育てるという「対人援助」の場そのものへの取り組み方（参加の仕方）の多様性を明らかにした上で、取り組み方の違いと「大人としての育ち」をとらえることになったのである。

本論の目的は、これまでの研究活動で積み上げられた知識と言葉づかいを整理し、研究をまとめていく用語としていくために、基本となる概念を明確化することにある。

子育て支援活動 「支えあいの輪」への参加についての検討

第一の焦点は、子育てをしている親への支援活動の参加実態という現場での問題を明らかにしながら、子どもは親だけで育てるものではない、という保育園の保護者むけに考え出された「支えあいの輪」という考え方がどのような有効性をもつのかを考えることにあてられる。

「親はなくとも子は育つ」という格言がある

ように、緊密な人間関係を基盤にしているコミュニティでは、子育ては親しい人の中で共有されていた。現代でも、出産は親元へかえってする人は多い。産前産後の休暇が保障されているように、母親による育児はすぐには始められないので誰かが世話をする必要はある。新米の母親の子育てには周囲からの具体的なアドバイスが欠かせない。この「支えあい」のシステムが利用できないか、うまく機能しないところにむけて公的な支援が行われている。職場へ復帰するために子どもと共にいて世話をすることのできない親を支援する「保育所」と、子どもと共にいて世話をしているもストレスがたまったり、適切な世話ができないという不安もっている親への支援とに大別できる。

「子どもを育てる」ことは個人の私的な領域だという考え方もある中で、公的援助を必要とされてきている後者では、「対人援助の場」を作る、参加するなどの過程での問題が明らかになりやすいことが考えられる。まずは後者のシステムについて検討しよう。

(1) 子どもを自分で世話をしている母親に対する子育て支援

子どもが生まれ、世話をしなければならなくなると、我が子がかわいいと思っていても、夜中に何度も起こされたり、泣き止まない子をなだめたりする苦勞も気にならないとばかりはいかなくなる。24時間子どもに拘束され、振り回されていると感じることが多い。それでもこうした親として行動することへのストレスがうまく克服されていけば問題はない。「支えあいの輪」の機能の一つがこうしたストレス緩和のための支援にある。もう一つの機能が、子どもの世話で行動が制約されるために、「自分の行動」ができなくなることへのストレスの緩和である。赤ちゃんの首が据わらないうちは、外へ連れて出るのは控えたほうが無難である。そ

うなると生活必需品の買い物も誰かに頼まなくてはならないし、美容院に行くなどとてもできない。連れて出ることができるようになっても行動はかなり拘束される。短時間でよいから子どもを預かってくれるところが欲しい。こうした要求に対応した支援がおこなわれている。

近隣ネットワークと子育てサークル

子どもを育てている生活の周辺に、親しく声を掛け合う関係の人々があれば、子育てのイライラを解消するおしゃべりや短時間なら預かってもらうこともできる。もちろんそれには暗黙のルールがあって、頼りっぱなしではいけない。何らかの意味で「お互い様」と思ってもらえるような貢献が要る。新しくできた人間関係の中ではこうした関係の結び方が難しいこともあって、気を遣うのを回避する傾向が見受けられる。近隣ネットワークを育てることと大人としての発達とは結びついている。（垣内・桜谷，2002）

自発的な子育てサークルの発生は、近隣よりももう少し範囲の広いひとびとが関わっていることが多い。近くの公園での知り合った人、なんらかの催し物に参加したときのおしゃべりなどがきっかけになっている。近隣よりも自分のフィーリングにあった仲間がつながりやすいのが特徴である。ここでは気のあった仲間たちが、単なる「お互い様」をこえて、自分たちのための活動を運営していくことへと発展することがある。

一方、こうして運営され始めた「子育てサークル」や、自治体や保育所、NPOなどが運営する子育て支援のための「サークル」の活動に参加してくる人々がいる。最近では広報紙などに多くの情報が載せられているので、自分の都合のよいところに参加してみることができる。親子で参加しているので、日ごろ親とだけで過ごしている子どもが楽しめるかどうかと親自身の居心地のよさがポイントになる。浜名（2003）の報告にもあるように、参加者が一定の役割を

分担することによって積極的にかかわってほしい。お互いが子どもを育てるための役に立つことができれば、支えあいの輪になっていく。

しかし、どこでも、だれもがこうして積極的な参加者になれるわけではない。親の都合が優先されて、サービスを受け取ることはしても主体的に関わろうとしないものも多い。こうした人の中には参加者同士で情報を交換してあちこちの催し物を渡り歩くものもあると聞く。それでも、個人的な知り合いがふえることで形の違った「支えあいの輪」ができることもある。そこで交流からは相互作用による学びが生まれる可能性がある。

見知らぬ他者との直接的ふれあいに苦手意識がある人たちのために、インターネットで子育ての悩みを打ち明けあうサークルがある。誰かがわかってくれるというだけでストレスの解消にはなる。チャット仲間とおしゃべりも、子育て環境への直接的変化はもたらさないにしても、自分の意見も誰かの役に立っていると思えるだけの相互性が生まれているのかもしれない。

一時保育

もう一つの実践的な要求に応えようと設けられたのが一時保育である。従来の保育所が日常的に保育に欠ける子どもたちを対象にしていたのに対して、親の都合で世話ができない子どもたちを預かるサービスである。

一時保育は、親にとっては都合のよいシステムであるが、子どもにとってはストレスが高いことを考えに入れる必要がある。親と離れた子どもをいかに安心して過ごさせるかは、保育者側の技量の問題だとばかり考えてはならない。子どもがその施設の環境に慣れ、保育者と親との信頼関係がとれていることが前提になる。

デパートなどの買い物の時間や、催し物への参加者のための一時保育が設けられ、利用者も増えてきているが、子どもは単なる預かりものではなく、そこで共に過ごす仲間なのであ

る。どんな場合でも「支えあいの輪」に参加するということは、お互いを繋ぐ信頼を築くことから始まることを忘れてはなるまい。

(2) 女性の仕事の拡大(社会進出)と子育て支援

母親(なぜか母親に集中する)が保育所に子どもを預けてまで働くことは「育児放棄」であると考えられた時代もあったが、育児休暇あけからの1歳児保育の需要はたかまっている。保育所は働く母親のための育児支援の一環として位置づけられるようになったのである。世の中が24時間サービス型の暮らしになって、深夜に働く職種は急激に増加している。介護福祉が充実すれば夜勤の職員が必要にもなる。

子どもは昼間に活動し、夜にはぐっすり眠ることで健全に成長する。しかし、すべての親が子育てを中心とした生活設計をするわけにはいかない。親にもそれぞれの事情がある。

これまでは、親族や地域といった支えあいがこうした事情をフォローしてきていたのだが、それに代わるものとして必要とされているのが、親に代わって子どもの健全な発達を支えてやるための夜間保育であり、24時間対応型の保育である。(シンポ報告, 2004)

通常の乳児保育、幼児の保育であっても生活のほとんどを家庭を離れて暮らす子どもたちの発達の基盤になるのは保育所での活動である。彼らが楽しく元気で生活できるためには、親と保育者との信頼関係や連携が欠かせない。保育所での生活と家庭での生活を上手く繋げて、全体としての環境を整えてやるためには、親もそれなりの協力をしなければならない。熱心な保育園ほど親への注文も多くなりがちであるが、親と保育者が子どもの幸せを一番に考えながらも、相手の立場も考慮した対応を求め実践していく過程では、多くの相互作用がみられる。昼間の暮らしの楽しさとストレスとを受け止め、話し合う時間が親子の絆を深める。子育てを保

育者にまかせっぱなしにしたり、自分流の考えを押し付けたりしないことで、苦労しながらもともに成長する楽しさを味わう場になる。

もう一つ大切なことがある。保育所にはいろいろな家庭環境で育っている子どもたちが一緒に暮らしている。子どもたちは、共に暮らす仲間のもっている違いを受け止めながらも、なかよく遊び、学べるように配慮されている。十人十色の認め合いが自然な形で実践されているのである。このような保育環境を整えている保育者たちは、保護者との関わりの中でお互いの違いを認めやすくなっているはずである。保育所という、「私たち」の暮らしを私のものとして活動する中で育まれるものを、大人の発達にも取り込んでいけるはずである。

(3) 子育て支援の場への参加過程

子どもを育てるという親としての責任を回避できない事態に直面したときに、身の回りにいる人々や社会のシステムに支援を求めてくる人たちでも、そこでの参加の仕方は様々である。ここではわれわれの研究プロジェクトの活動から見てきた、それぞれのシステムへの個人が参加する様態について明らかにし、「共同への参加」に関する問題点を考えてみたい。

1) 既成の「子育てサークル」に参加する過程と様態

子育てに悩みを抱える人たちが、すでに活動している「子育てサークル」のプログラムに参加するしかたは様々である。その場が参加者にとっての「共同の場 支えあいの輪」としてどのように機能しているのかによる違いでもある。次にあげるのは、様態の広がりでもあり、深化の過程を示すものとも考えられる。

自分の関心にあったサービスを選んで参加するだけ

サービスの享受にとどまらない参加者同士の交流への参加

自分のできる範囲での活動の分担，意見の交流

小人数の個人的グループによるより親密な関係づくり

自ら運営する「子育てサークル」活動の立ち上げ

から へと進むかどうか，「共同の場」になるかのポイントである。参加者の意識と活動そのものへの関与・分担のありかたが決め手になっているようである。「子育てサークル」での共同は、自分問題を解決してくれる支援の場が快適であった人たちを、安心できる（小さな失敗は許しあえるなど）仲間へと誘い、新しい「支えあいの輪」をつくりだす中で生まれている。

2) 保育所の保護社会活動への参加過程

保育所を利用する場合は、私に代わって子どもを育ててくれる人（保育者）が運営する集団保育の場に子どもを託するので、子どもの育ちへの関与の共有性をどのように作り上げていくのかが問題になる。そこでの参加の様態には次のようなものがある。

自分と子どもの生活にみあった支援をしてくれる施設を選択して参加

子どもの生活を保障するために不可欠な保育者との連携に参加

自分の生活を改変することもふくめた保育者への協力をとおしての参加

園の行事の一部としての保護者会活動への参加がつくる親同士の交流

保育園全体を保護者をふくめての子育てコミュニティにしてい

ここでは、から と から とに、少しの段差が感じられるが、参加の頻度を無視すれば、多くの保護者が の段階までの参加を果たしている。このことは、保育園での共同が、いろいろな人たちとのかなり長期にわたってのかかわりとなることと関わっている。保育者が子ども

の個性を伸ばすために一人一人を認めていくように、参加する大人たちにも認め合いが広がっていくような「支えあいの輪」になることが目指される。そのことへの小さな抵抗感が少しずつ克服されていくのである。

大人の学びの場としてみた「共同 支えあいの場」の形成と参加過程

(1)「共同の場」の成立過程における問題

前項までに見てきたように、「子育て支援プログラム」への参加は、自分の行動を変える積極的な参加へと発展すれば、新たな大人としての発達の間となる可能性が示されている。それなのに、多くの参加者が積極的な参加に到らないという現実がある。そこには共同という活動への参加に関わる問題の本質が関わっていると考えられる。

問題の本質に迫るための一つのヒントを示してくれるのが、ボランティア活動や住民参加型の集団運営に視点を移して取り組まれた「参加社会の心理学（権山，2000）」である。この中で菊池（2000）は、集団参加性という問題を取りあげ、古旗（1968）が示した次のような定義を紹介している。

集団参加性とは、集団生産性を高めるために集団のメンバーが、集団目標に合致する共同行動をする程度のことをいい、以下の3つの要因によって決定される。

連帯性：集団の課題に対して他人と一緒に活動すること、および集団の目標を遂行することにメンバーたちがよるこびと満足を感じる程度

勢力性：他人の行動や態度、あるいは集団の決定に影響を与えることのできる程度

親和性：集団のメンバーにたいして、どの程度友好的で温かい関係を維持するこ

とができるか

ここでとりあげられている共同は、参加集団に共通する「課題」があり、それを達成するという共通の目標のためのものである。本論が扱ってきた子育て支援のグループへの参加の場合には、同じ目標を共有できる人たちとしてほかの参加者をとらえることができはじめて共同の出発点になるということだろう。ここで取り上げている共同が生まれるときには、享受者として参加している間に連帯性や親和性が育まれ、時には努力も報われることで、参加すべき仲間活動として認知されるという過程が前提になる。

子育てサークルへの参加者の共同が成り立ちにくいのは、目標である「私たちとその子どもたちのために」という表現が具体性に欠けるので、時には個人により内容の異なる意味合いにとられる場合も生まれることに一因があるのかも知れない。同じ目標を共有しているという感覚をどのレベルで持ち合おうとするのかを調整する役割をになう人が必要になる。こうした小さな違いを認めていくためには親和性の役割が大きい。類似性や親和性の高いもの同士だと「支えあいの輪」が上手く機能するのはこのためでもある。

保育所での共同では、目標を「私たちの子どもの幸せ」とすることに問題は少ない。誰もが自分の子どもに一番の関心をもってはいるが、自分の子だけがよければいいとはいえないし、「私たちの子ども」に具体的なイメージがもてる。それでも保育者との連携にずれが生まれることもある。保育所では、親和性の高いもの同士だけで集まって共同することはできない。そこで、たくさんのずれや問題を出し合い、連帯性を発揮してある程度の解決がはかられる。このときの話し合いがうまくいくことが参加者を増やす契機になる。話し合いの過程に参加することによって、お互いの親和性が高められ、参

加者の多様性を認める基盤がつくられる。

(2)「共同 支えあいの輪」の運営への参加が もつ問題点

子育てサークルなどの「共同 支えあいの輪」の運営には、「お互い様」の精神に基づいた参加の努力が求められる。「お互い様」は「give and take」と同じではない。それぞれの立場に応じた参加 できる人がやる、やれないときは感謝する を実現していくための連帯がかなめとなる。しかし、こうした連帯がいつもうまくいくわけではない。特定の個人が仲間集団の決定への影響（勢力性）を持ちすぎると、全体としての参加性は弱まる。共に暮らす人の多様性を認め合うことができれば、連帯性の中で、個々人の勢力性を大切にす方向をめざすことができる。

「支えあい」には、相互依存（interdependence）という意味合いが含まれている。お互いの弱さを助けあっていくという交流には、互いの独立性と相手への依存性とが一方へ偏らない状態が基盤となる。この状態では、独立した個人の認識「私」のなかに「私たちに含まれる他者」が含み込まれており、「私たちとしての他者（共同的な他者）」への依存は、外部の人間としての他者（異他的他者）とは、異なる意味をもつものになるのである。

共同的他者と異他的他者とはフッサールのことばである（谷 1998）。彼は、生まれ落ちたときから養育してくれている親は、子どもの自我に馴染んだ共同的他者としてあり、成長するに従ってそれ以外の他者（異他的他者）との交流を経験する中で、共同的他者の枠組みを自覚的に拡大していくと考えた。つまり、私たちは「私の中に私たち」を取り込めるようになっていくと考えるのである。「支えあいの輪」はこうした認識を共有する「私たち」がつくりあげていくのである。

一方、中島（1997）は自主独立（independence）でも依存（dependence）でない状態、相互に依存しあうことの中身を吟味せずに「ささえあい」という言葉を使うことの危うさを、日本の社会的風土の特徴に照らして、次のように指摘している。

個人が個人に自然に向き合う伝統のある社会では、「ささえあい（interdependence）」もまた個人的レベルのものが主になる。だが、こうした伝統が欠如しているわが国では、「ささえあい」とはスローガン・「お上」からの達し・定式といった形になりやすい。

彼のこの指摘は、個人の自立性を抜きにした、スローガンとしての「優しさ」や「思いやり」の空虚さを説明したあとで言及されている。「優しさ」や「思いやり」と同じように「ささえあい」という状態があり、それを行う（弱者に手を貸す）こと、が推奨されるだけに終わり、弱者側には「支えられる権利」が生まれることを懸念しているのである。

中島が個人レベルからみた（interdependence）にどんな内容を捉えていたかは不明だが、「支えあい」に参加する個人が、お互いにながしかの変容をうけることを自覚していることが必要なのだと考えてもよからう。「支えあいの場」らしきものはあっても、参加者の共同が成立していないことが多いのも事実である。

社会的相互作用による学びを提唱しているRogoff（1998）は「相互依存性」という用語を、参加者のどちらにも弱みや得意がある中でお互いが知恵を出し助け合いながら学ぶ、発達過程を含むものとして用いている。そのために、親族や地域社会のように長期にわたるつきあいでは「今は助ける側でもいずれお世話になる」という考えが機能しやすい。

「支えあいの輪」における相互依存は、ある了解の範囲内でお互いを身内のようにとらえ（共同的他者）、誰にでもお互いの役に立てると

きがあることを認め合うことを基盤としているのである。

(3) 大人の発達を考えるための「支えあいの輪」の機能

本論では「子育て支援」への参加の一形態である、保育所の保護者会活動に対して用いられた「支えあいの輪」という概念が、どのような参加過程を含むものかを明らかにしながら、その参加をとおしての学びと変容が「大人としての発達」をもたらすものと捉えられるのかを考えようとしてきた。

これまでの研究経過から、「大人としての発達」とは社会的な文脈の中で、仲間との相互作用を通してなされる、「支えあい-相互依存」の共同への参加には他者との調整過程が必要となるために多様な学びと発達の契機が含まれている、大人の発達には「十人十色の認め合い」とう社会における自己と他者との関係の認知に至ることが大切ではないか、という3つの視点が浮かび上がってきている。これらを柱としながら「子育て支援の場」に参加することをとおして「共同の場」を運営する経験が参加者にもたらす「学びと発達」についてまとめておこう。

* 共同の場の参加経験における学びがもたらす発達の契機

(1) 自分の努力だけでは達成できないことがあり、それを他者との相互依存によって達成できることを知る。

「子育て」という自分たちに課せられた大切な役割は、自分たちだけの努力ではまっとうできないものだということを自覚することがはじめにある。青年期までは自立を目標に自分でやれることを増やしてきた若い親にとって、「人に頼る」ことの意味を見出していかなばならなくなる。

(2) 他者との共同のための、相互性を身につけ

ること。

活動への参加から共同へとつなげていくためには、自分からも発信し仲間と話し合いながら活動するという「相互性の発揮」が必要とされる。はじめからうまくはいかなくとも気の合う人にめぐり会えることが後押しをする。

(3) 共同する中で、自分も相手も変わる（発達途上である）ことを認識する。

これは、自分とは意見を異にする人にぶつかったときの対応によって生まれる。共同のための話し合いにおいて、主張したり妥協したがくりかえされるのだが、自分も相手も変わりうる存在として認め合えることに焦点がある。

(4) 共同の場での学びを自分の人生（発達過程）へ位置づける。

最後にのぞまれるのが、自分の生活と人生における自覚的な学びへとつなげていけることである。「私の中の私たち」というものの考え方が、人生のいろいろな場で自覚され、一人生きているのではない人生を上げられるかであろう。

さらに、ここで明らかにされた点を、筆者が考えてきた生涯発達のモデル（高木、2000）に対応させて考察すると次のようになる。

第一点目は、世代交代の時期におこる「世話される」ものから「世話する」ものへの移行の視点からとらえることができる。個人が社会に適応していくという関係から見た、親からの世話をうけなくなり、社会をになうものとして「自立」という発達の目標が、社会と個人との「自己統合」へと導く契機になることを示している。子どもの世話をすることが、個人の行動だけにとどまらず社会の一員としての自覚を強く促すことになるのである。

第二点目と三点目は、青年期までに支配的であった、社会の価値システムへの参加を目指して取り組まれる「継承的学び」が、社会の一員としての学びとなっていくためには、共同する

仲間との親和性の成立が大きくかかわっていることを示している。それは、人間の学びの基本が、仲間との中で共感的に取り交わされる交流を土台とする「共生的学び」にあることを再確認させるものでもある。ただしそれは、子どもの時のようは無制限のものではなく、節度をもった上での交流でなくてはならない。大人の学びが難しいのは、これまでに作り上げてきたものへのこだわりが、変化可能性を阻害する点にある。

第四点目は、生涯発達モデルで提案した「社会・歴史的認識性」の、個人と社会の関わりの部分にあたる。継承的学びの対象としては「世界という広がりを知る、歴史の一時点をして現在をとらえる」ことが進行するが、次の自己統合的学びへの出発点として、「私の中の私たち」を自覚することがある。フッサールのいう「自我になじみのある共同的他者」に近い存在として、周囲の他者を自覚的に「私の中の私たち」として取り込んでいくことが求められる。そしてその取り込みは、他者の全人格を対象としておこるわけではない。他者の人生の多様性を認め、お互いに相互依存することを認め合いながら生きる「支えあいの輪」は、「子育て支援」に限らずたくさん存在する。それらに参加する中で、「私」の育ちを「社会」の中に位置づけていくのである。

ここで見出された「大人としての発達」の視点は、世代交代を契機として突然開始されるわけではない。学校という「予期的社会化」のシステムでは、大人になるための学びも取り入れてきたつもりである。社会へ適応するという意味で「社会化」という言葉がもちいられてきたために、うまく機能しなくなっているという指摘もある。門脇（1999）の言うように、子どものときから「社会力」をつけるという視点に変えてみることもできよう。

大人になってからの発達は、ひとりひとりに「自分なりの人生」があることを認めることに土台が置かれる。この土台の上に立って、「共同が必要になっている仲間同士が連携することで何が学ばれるのか」を、具体的な学びの場の形成過程を視野に入れながら明らかにすることが、本プロジェクトが共有する目的ということになる。

文献

- 穂山貞登監修 2000 「参加社会の心理学」川島書店
- 浜名紹代 2003 育児サークルに参加することで見えてくる親の育ち 日本発達心理学会第14回大会論文集
- 垣内国光・桜谷真理子編著 2002 「子育て支援の現在：豊かな子育てコミュニティの形成をめざして」 ミネルヴァ書房
- 門脇厚司 1999 「子どもの社会力」 岩波新書 648
- 菊池章夫 2000 社会的問題解決と個人のスキル 秋山貞登監修「参加社会の心理学」川島書店
- 中島義道 1997 「＜対話＞のない社会：思いやりと優しさが圧殺するもの」PHP新書032
- Rogoff, Barbara 1998 Cognition as a collaborative process *In William Damon Ed. Handbook of child psychology, vol. 2, Wiley*

シンポ報告

- 高木和子 1993 生涯発達における学びの多様性と個性化の過程 プロジェクト 研究の枠組作り にもつて 立命館教育科学研究, No. 3, 1 - 13
- 高木和子 1995 個性化の過程としての生涯発達の視点から社会生活における「学び」をとらえる 立命館大学教育科学プロジェクト研究シリーズ 3 - 15
- 高木和子 2000 生涯発達モデル構築への視点 「世話する / 世話される」関係の世代交代 立命館教育科学研究, No. 14, 41 - 52
- 高木和子 2002 支えあいの輪の中で子どもを育てる 高木和子・蜂ヶ岡保育園「雨あめ降れふ

- れ：ぼくら蜂ヶ岡の子どもやもん」 かもがわ
出版
- 高田 薫 2004 共同問題解決としての子育て：他
者に頼ることで生じる人との付き合い 立命館
人間科学研究, No. 7, 35 - 45 シンポジウム
報告2004 24時間保育から考えるこれからの
- 子育て, 子育て 立命館人間科学研究 No.7.
87 - 100
- 谷 徹 1998 「意識の自然：現象学の可能性を拓
く」 頸草書房
- (2003.12.25. 受理)